

# 見返りを期待しない利他行動における共感の意義

—— 奉仕活動の動機から考える ——

2007

川上祐美 Yumi KAWAKAMI

指導：戸川達男 教授

## 第1章 本研究の背景と目的

人間には、他者のために生涯奉仕したり危険を顧みず人を助けたりするような「見返りを期待しない利他行動」がみられるが、そのような自己犠牲的な行動はなぜ起こるかについては未だ十分な理解には至っていない。

現実の問題としては、貧困、難民、高齢者、障害者などの援助を必要とする状況が地球規模で拡大している一方で、国家間・宗教間の対立など援助を阻む要因も数多く、競争社会において弱者の援助が切り捨てられることも少なくない。それゆえ援助の本質について再考しつつ共通理解を得ることは急を要する事柄である。

本研究では人間科学の枠組みにおいて学際的な考察を試み、利他行動の動機についての統括的な新たな知見を得ることを目標とした。

## 第2章 利他行動についてのこれまでの見解

利他行動は以下の図のように分類される。見返りとは金品や同質の行為を返還されるだけでなく、社会的評価や精神的充足なども含まれる。見返りを期待しない利他行動の起こる要因として、他者への共感があるかどうかを本論文で注目した点である。

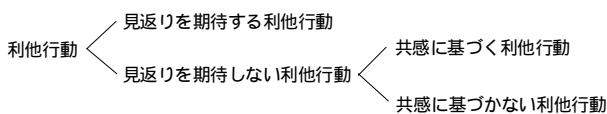


図1. 利他行動の分類

利他行動についての哲学的見解としては、徳倫理学では共感に基づくものとして、義務論では普遍的規範として、功利主義においては客観的効用として説明されるが、見返りを期待しない利他行動を動機付ける要因については共通理解に至っていない。

社会生物学においては、利他行動には血縁選択による相互扶助、互惠的利他行動、自己犠牲行動、弱者支援行動などがあり、個体が犠牲になってもその属する集団に行為の見返りがある場合は、集団の適応度が増すという理由から利他行動が進化したと考えられる。人間の利他行動の多くも同様のメカニズムにより説明できるが、不特定な非血縁者とりわけ弱者への援助行動は動物にはほとんどみられないため、人間特有の社会的行動であると考えられるが、やはりその要因は明確にされていない。

## 第3章 宗教・文化にみられる利他行動

キリスト教、イスラーム、ヒンドゥ教、仏教など伝統的宗教においては「他者への利益」について様々な見解がみられ、基本的には共通して「包括的な他者」の利益のために行われる行為のみを善とし、たとえ自己犠牲を払ってもそれは現世利益を超えた真の利益として、より高次に価値付けられる。

近代以降における人間の社会的行動は、従来の徳や信仰によるエートスに代わって、弱者支援を社会のコンセンサスとして受け入れ、その基盤の上で市民参加が発展した。

#### 第4章 人間の利他行動についての事例と調査

現代のボランティア活動は、医療福祉、災害、環境、教育、国際支援など多岐にわたり展開されてきたが、その動機は様々で奉仕者に共通する背景については明確にわかっていない。

そこで筆者は、修道者・非修道者12名の奉仕者に対して独自にインタビュー調査を行った結果、宗教的背景にかかわらずすべての人に他者への強い共感がみられ、信仰をもつ人々は、信仰・奉仕・共感の相互作用によって奉仕活動が着実に維持されていることが示された。

#### 第5章 共感と利他行動についての新たな見解

人間だけが強い共感の性質をもつに至った理由として、下図のようなモデルに表すように、

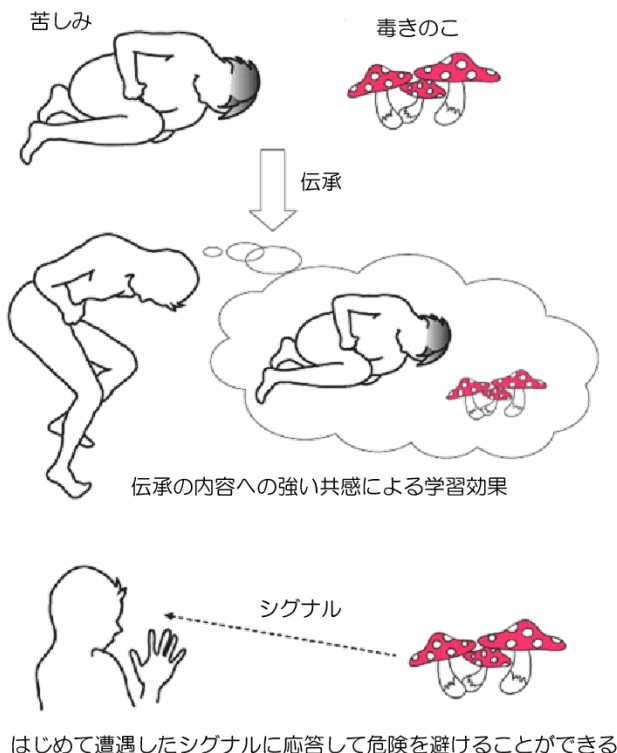


図5 . 強い共感の性質があれば、自分の体験の場合と同様に伝承された事柄から学習することができる

「共感という遺伝的性質」と「生きる知恵の継承としての文化」とが共進化した可能性が考えられる。そして見返りを期待しない利他行動が強い共感によって起こるという説明を示した。

#### 第6章 遺伝的性質に拘束されない利他行動

遺伝的欠陥や発達障害などにより共感が発露されない場合でも、宗教倫理教育によって生得的な性質の有無にかかわらず利他行動を実践できる可能性が考えられる。これは、宗教や倫理が遺伝的性質や生育条件の限界を超えて、より普遍的に人間の行動を律することができる点において意義があることを示す。

#### 第7章 考察

本研究は、見返りを期待しない利他行動の動機について、哲学的考察および進化生物的検討とともに宗教的観点も考慮したアプローチであり、利他行動についての総括的な新たな見解を示すことができたと考えられる。

#### 第8章 結論

本研究の成果より、利他行動の動機として「他者への強い共感」があり、それは宗教や文化の違いにかかわらず人間に共通する生得的性質であると考えられる。またその性質の起源は生きる知恵の文化との共進化によることが示唆され、もしそうであるとすれば、人間には「見返りを期待しない利他行動」を行う特性が備わっていると考えることができる。したがって、それは多様な宗教・文化に共通する一致点となり得るはずである。さらに宗教や倫理は、生得的性質によらず普遍的に人間の行動を律するものであることから、遺伝的欠陥や発達障害などの限界を超えて、すべての人間に利他行動を促すことができる点に意義があることを示した。